総合診療・感染症センター開設

やまなし医療最前線《88》

県立中央病院から

多彩な症状、柔軟に対応

三河　貴裕医師

県立中央病院は4月から総合診療・感染症センターを開設し、傘下に総合診療科、感染症科、女性専門科を置く。複数の科にまたがる病気を抱える患者の診察をはじめ、どの診療科を受診したらいいのか分からない患者や救急患者に対応し、各診療科に振り分ける「トリアージ」的な役割も担う。

現在の医療現場では、主に臓器別に細分化された専門科によって高度な医療が担保されている。一方、高齢化に伴いさまざまな病気を併せ持つ患者が増え、全国的に総合診療のニーズが高まっている。

4月から同センターで診療に当たる三河貴裕医師は、総合診療を「定食屋さん」に例える。「専門店のような懐石料理やフレンチではないかもしれないが、和洋折衷いろんなものが食べられる。定食屋でも、よりハイレベルな料理を出すのが責務」と話す。

8年間勤務した亀田総合病院（千葉）では総合診療部門、感染症部門でそれぞれ研修を受け、発熱症状を訴えるさまざまな疾患や結核、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）感染症などの治療に当たってきた。海外旅行前の予防接種や高山病予防などの渡航医学、がんや肉腫治療、緩和ケアなどの腫瘍内科も専門とする。

「まずは山梨の患者さんのニーズを把握し診療の幅を広げていきたい」と三河医師。病院の〝入り口〟で適切な治療を受けられるよう患者を導くと同時に、疾患の重症度や緊急性にも柔軟に対応する考えだ。また、初期・後期研修医の教育の場としても期待されている。

三河医師は「総合診療医は住民がどんな社会背景を持っているか知ることが重要」と、病院内の診察にとどまらず退院後の生活を含めて診る必要性を強調。「往診を実践している地域病院や開業医と連携しながら、さまざまな病気を満遍なく診られる人材を育てたい」と意欲を見せる。

掲載日：2015年03月26日／ぶんくら／紙面頁015
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社